

保育者の専門的発達 — 幼稚園保育文化と語り —

B3H004 野口隆子

主査：福丸由佳 副査：無藤隆・高田文子・岩立京子

問題と目的

保育の場において、保育者は子どもやクラスにおける意図的・即興的な実践行為を通して暗黙的・身体的・文脈依存的な知を獲得していく。その際、様々な経験・価値観を持つ多様な保育者と共に協働的实践をおこない、言語化・意識化、対話、省察を通して協働探求をおこなうが、そこには共通の志向性、意味が存在すると考えられる。ロゴフ（2006）は、異なる観点の間を橋渡しする際人々はそれぞれの取り組みを互いに調整するため、考えを伝え合う共通の言語や見方を探し求めると述べている。保育実践で用いられる言葉、語りは、保育実践に重要な機能を果たす。保育を言語化することそのものが保育者の専門性であり、さらに保育実践の共同体で共に探求するプロセスは保育者の専門的発達に不可欠なものだと考えられる。

本研究では、日本の保育における専門家集団の文化（本研究では“幼稚園保育文化”に着目する）において、保育者が実践行為の中で志向し価値づける共通の“意味”を語りから検討することを第1の目的とする。保育の場では様々な経験・価値観を持つ多様な保育者と共に目標を共有し、協働的实践・協働的探求をおこなうことが求められる。日本において、園内研修がその一つの形態であるが、保育者間において実際にどのような語りにより実践的学びが生じているのかを検討するのが第2の目的である。第3に、保育者の実践の知は、職場集団の文化、同僚性など長期的インフォーマルな関係性の中で形成されるが、そのプロセスにおいて他の保育者から受ける指導・支援（メンタリング）にはどのような特徴があるのか。熟達者（メンター）との関わりを通して専門的発達はどのように促されるのかについて検討をおこなう。

本研究の構成

本論文の構成を図3-2に示した。まず第I部において、先行研究のレビューをおこない、本研究の目的と方法について論じている。第1章では「教師・保育者の実践知と熟達、専門的発達」、「専門的発達を促す協働の場：園内研修とメンタリング」、「日本の保育文化の志向性と保育的価値」に関する研究を整理し、文化に埋め込まれた保育者の専門的発達のプロセスについて考察した。

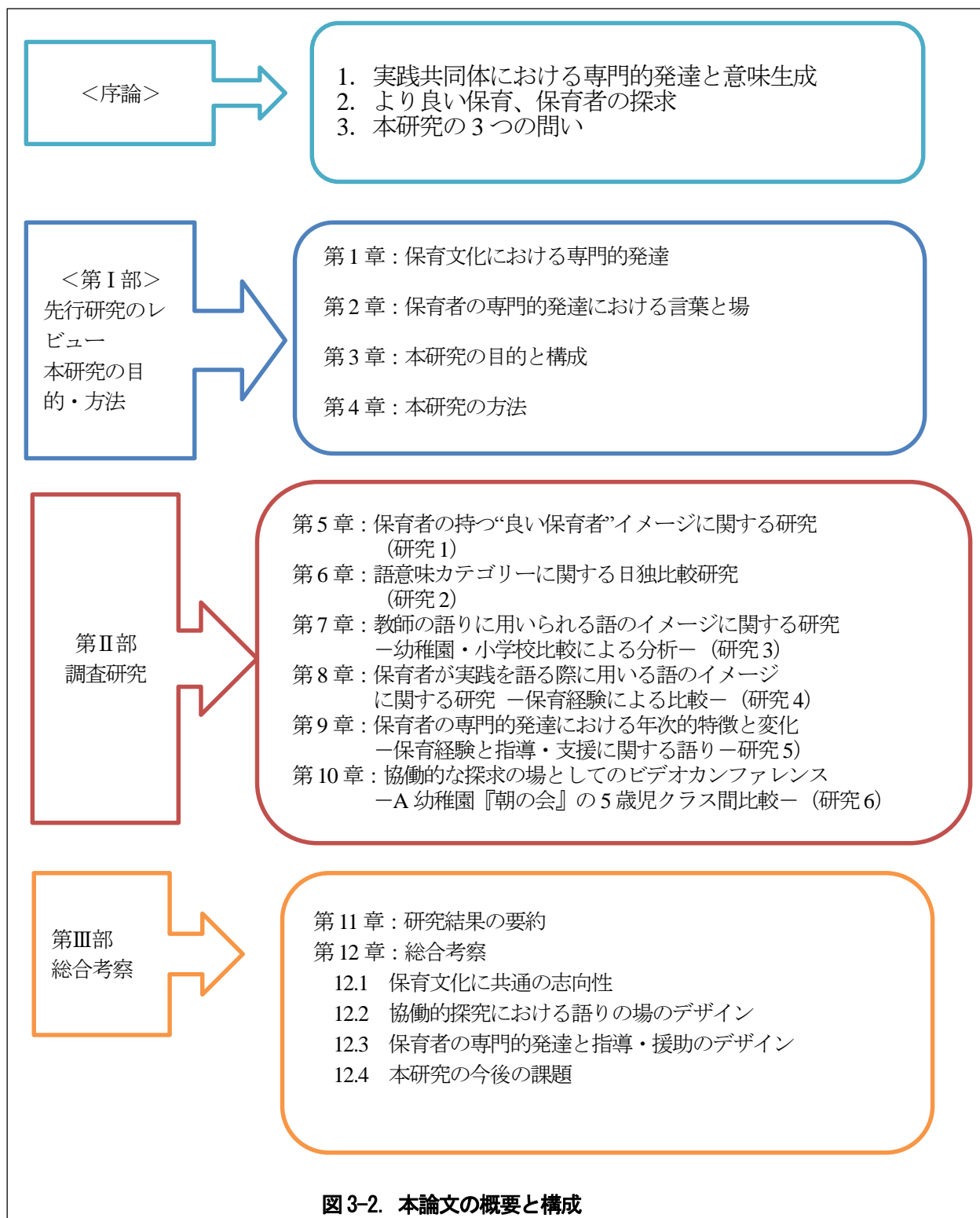


図3-2. 本論文の概要と構成

第2章では、保育実践に関連する「文化的道具としての語り」、「実践の暗黙的・身体的・文脈依存的・即興的・協働的特徴」に関する先行研究を概観し、保育実践の特徴とその言語化や伝達、学びの難しさについて論じた。さらに「保育者のライフコースにおける語り」に関する研究に着目し、特に近年増加しつつある教師・保育者の転機をめぐる語りやライフストーリー・ライフヒストリーに関する研究をまとめ、保育者の専門的発達と語りとの関連性について論じた。

第3章では、“保育文化”とその主体となる保育者集団（本研究では“幼稚園保育文化”とする）について論じた。本論文では保育者という専門家集団に固有で共通性を持った志向性、行為、シンボル、ルールなどのパターン、保育者集団内に埋め込まれた文化的道具を含み“保育文化”と呼び、文化・歴史的な文脈における成果として伝達・獲得されると同時に保育者及び保育に関わる専門家集団による協同的实践・協働的探求の過程において構成されるものであるとしている。この点において、保育者個人の経験であるとともに保育者という専門家集団に共通の社会歴史的経験であり、学習過程である。保育者の専門的発達は、保育文化に埋め込まれており、専門家集団が能動的におこなう協働的実践・協働的探求を通して生じる。その過程において、文化的道具としての語りは中心的な機能を果たすものとし、本研究の方法論上の中核に位置づけている。

本研究では、マクロなフェーズとマイクロなフェーズの両側面から保育文化を明らかにすることを試みた。第5章、第6章では、よりマクロなフェーズとして、保育の基本を踏まえた保育をおこなっていると仮定される全国の国公私立幼稚園における保育者集団（研究1）、日本における枠組を共有する保育者集団とは異なるマクロな集団としてドイツ（ドルトムント）と日本の保育者との比較（研究2）をおこなった。保育文化は他の教育機関における専門家集団と比較した際にさらに共通性と差異が浮かび上がると考えられる。第7章では、学校教育法に位置付きながら異なる専門性・教育目標をもつ幼稚園と小学校の教師を対象とし、各々の教師集団が持つ文化を検討した（研究3）。保育文化を共有する保育者集団内においても、文化への参入過程の比較から若手集団と経験者集団が想定される。第8章では、保育の基本を踏まえて運営される全国国公私立幼稚園の保育者集団における若手と経験者の比較をおこなった（研究4）。第9章、第10章では保育の基本を踏まえた標準的な園であり、特定の地域で保育の質を保ち運営をおこなっている私立幼稚園A園を事例として取り上げた。A園に勤務する保育者の語りから専門的発達における共通のプロセスと必要な指導・援助を検討した（研究5）。さらにA園5歳児クラスの『朝の会』のクラス文化に焦点をあてたビデオカンファレンスに参加し、協働的探求の場中で生じる語りと道具としてのビデオ、メンタリングの機能について検討した（研究6）。

方法

第4章では本研究の方法論、対象、分析方法を整理した。本研究の特徴は、実習生、若手保育者、ベテラン保育者、といった多様な専門的成長段階の協力者を対象とした点、研究手法として多声的ビジュアルエスノグラフィー (Tobin, Wu, & Davidson, 1989) の援用、半構造化インタビュー、質問紙法、ビデオカンファレンスの実践に参加したA園でのフィールドワークなど、多様な研究手法を用いた点、分析方法として質的・量的分析をおこなった点、すなわちマルチメソッドアプローチによるものである。また、研究調査をおこなう上での倫理的配慮について述べた。

結果と考察

1) 保育者の持つ“良い保育者”“良い実践”イメージ(第5章・第6章)

第5章「保育者の持つ“良い保育者”イメージに関する研究」(研究1)では、多声的ビジュアルエスノグラフィーの手法を援用し、関東・関西・九州の国公立・私立幼稚園計9園に勤務する保育者合計143名(保育経験年数5年未満の若手保育者73名、保育経験5年以上のベテラン保育者70名)を協力者とし、保育者が共通に持つ“良い保育者”・“良い実践”イメージを明らかにした。

第6章「語意味カテゴリーに関する日独比較研究」(研究2)では日本79名(東京、兵庫、九州の9園の公私立幼稚園の保育者7年以上36名、7年未満43名)、ドイツ63名(ドルトムント12の公立園の保育者7年以上39名、7年未満24名)を協力者とし、研究1と同様の手法を用いて日独保育者持つ実践知の様相と文化による相違・共通性について検討した。

保育者が共通に持つ“良い保育者”・“良い実践”イメージの中核は『子ども中心』志向であり、保育者のペースや主導性と対比的に語られることが多い。日本・ドイツ間、幼稚園・小学校教師間など、いくつかの専門家集団間で比較をおこなったところ、日本の保育において『子どもを主体』とするとは、個々の子どもに着目し保育者－子どもの相互作用において関与(もしくは関与せずに観察)するかどうかを判断し言葉を介した直接的指導をおこなうという点よりも、子ども同士の友達関係、仲間関係、集団としての姿や相互作用に着目し、知識・スキルの獲得よりも子どもが安心感を持ち楽しく遊んでいるかといった子どもの内的・情緒的状态、楽しさを尊重する傾向があること、子どもから表される発想や想像に意味を見出す傾向があること、時間的・空間的広がりを伴う日常的ルーティンや文脈をふまえて保育を捉える傾向があることが示唆された。子どもの遊びや主体性を尊重する保育においても様々なアプローチがあり、それらが重層的に織りあわされ、特定の文化集団の特徴として意味づけられていくプロセスがあるだろう。

2) 保育者の語りに用いられる語のイメージ (第7章・第8章)

「教師の語りに用いられる語のイメージに関する研究—幼稚園・小学校比較による分析—」(研究3)では、幼稚園計9園に勤務する保育者計92名(平均経験年数6.33年,SD=7.27,レンジ=31)、小学校計6校に勤務する教師101名(平均経験年数17.1年,SD=9.68,レンジ=36)を対象に、教師・保育者が実践を語る際に数多く用いる語のイメージに着目し、同一の語の意味に対する幼稚園及び小学校教師の捉えを比較検討することによって、保育文化・学校文化で求められる専門性の共通点・相違点を明らかにした。小学校教師と比較した場合、保育者は子どもの主体性や自発性を重視し、子どもの内面や行動を教師側が積極的に理解し読みとって共感しながら共に活動をおこなっていくこと、子ども同士の相互作用で生じるトラブルを捉える際多様な視点を持ち、成長や相手を知る機会など肯定的な側面として重視する傾向があること、が明らかとなった。小学校教師は教師側の指導、方向付けを重視し、子どもと直接対話をおこなうことで子どもを理解しようとする傾向があった。幼稚園・小学校の教師間で同一の語を使いながらその受けとめ方や理解に違いがあることが明らかとなったが、共通性があることも示唆された。保育・教育の主体は子どもにあり、教育が子どもに対する一方的な押し付けになることに危惧を抱く点、子どもを長い目で見る際に、長い期間・時間を通して成長・発達、変化の過程をみとり子ども理解をしながら教師が子どもを受容・信頼し、認め待つことを重視する点、活動を促す際には子どもの関心や意欲喚起を重視しながら、子どもの主体性や思いを尊重し、活動への発展や援助をおこなうとする点、環境構成において子どもの過ごしやすさや生活・安全面に配慮する点などについては、幼小の教師が共通して心掛けているようだ。

「保育者が実践を語る際に用いる語のイメージに関する研究—保育経験による比較—」(研究4)では、関東・関西・九州の国公立・私立幼稚園計9園に勤務する保育者合計143名を対象に、若手とベテランの保育経験による差異、熟達とともに獲得される専門的知見の特徴を検討した。分析の結果、同一の語に対し保育経験年数によって捉えが異なっているものがあり、特に『長い目で見る』ことや『トラブル』に対する理解において顕著であった。経験のある保育者は意図的側面、子どもの成長や発達の理解、計画などの長期的観点をより多く含み、若手保育者には子どもの様子を見る、見守る、という観点の方をより強く持つ傾向が示唆された。いざこざなどの場面に対し、経験のある保育者は「成長、相手を知る」という肯定的ともとれる内容が挙げられているのに対し、若手は攻撃行動など否定的な内容や安全面への配慮をより重視していることが示唆された。

3) 保育の場における専門的発達とメンタリング (第9章・第10章)

「保育者の専門的発達における年次的特徴と変化—保育経験と指導・支援に関

する語り一」(研究5)では、A園に勤務する保育者全員を対象に5年の間隔をおいた2時点の半構造化インタビューを実施した。保育経験の年次的推移に伴う語りの特徴と各段階で受けた(語られた)指導・支援との関連について検討し、特定の園文化における保育者の専門的発達のプロセスを明らかにした。保育者の語りの特徴を分析したところ、初年の段階では社会人としての自己への移行と園への適応が徐々に進むこと、クラス全体に対する指導方法の困難、保護者への関わりにおける戸惑いが示唆されるが、2年目以降は経験を参照し、自分なりの方法を模索するプロセスが生じること、後輩保育者が園に入ってくることで徐々に指導・支援を“受ける”立場から“与える”立場へと変容することに戸惑いと責任を感じ始めることが示唆された。そして、大体5年前後から役割や責任を強く感じる一方で身近なモデルがないことへの不安、園全体の活動を進めるリーダー的役割が付与されるといふ転機があることが示唆された。その時々の特徴と関連して、各段階の指導・支援(語られた指導・支援)の変容が明らかとなった。

「協働的な探求の場としてのビデオカンファレンス『朝の会』をめぐる5歳児クラス間比較一」(研究6)では、A園における5歳児クラスの『朝の会』に関するビデオカンファレンスの実践に筆者が参与し、フィールドワークをおこなった。日々のルーティンの中で保育者の意図性と子どもに応じた即興性が示されており、園共通でとりくもうとする『朝の会』において子どもと保育者が共に作り出すクラス文化があること、保育者自身無意識におこなう行為、特に身体的な実践がビデオによって意識され、他クラスの保育者から問われることで新たな意味や探求の機会となること、具体的な相互作用を促すメンターの存在が重要であることが示唆された。

総合考察

第11章では主な研究結果をまとめ、第12章の総合考察では総合考察をおこなった。園内研修(研究)等の実践による蓄積が進みつつある今日的状況を鑑み、保育者の専門的発達を考慮した協働的実践・協働的探求の場のデザインモデル、保育者の専門的発達のプロセスに応じたメンタリングモデル、リーダーシップの発達について提案した。さらに今後の研究課題について以下のように述べた。

1) 保育文化は様々な文化主体となる集団によって生成され、また様々な専門家集団の文化から影響を受ける。本研究で着目した対象以外の集団を対象とした研究をおこなうことで、保育文化の独自性と普遍的特性を明らかにすることが可能となるだろう。

2) 保育者の実践的学びは、協働的探究を志向する文化によって支えられている。協働的探究の場の具体と実態を明らかにし、効果的なデザインモデルを探る試み

が必要である。効果については、園内研修などの協働的探究が保育者の意欲や満足にもたらす効果、さらに協働的探究の場を超えたクラス実践、園全体の風土にもたらす効果、より長期的な保育者の専門的発達に及ぼす効果、さらに子どもの成長発達等への関連性など、様々な段階が想定できるだろう。

3) 保育の場では、様々な志向性を持った保育者が集い、同僚性を育みながら協働的探究がおこなわれている。保育者の専門的発達と促進の要因について、様々な保育者集団を対象とした研究をおこない、共通のパターンと保育者個人の要因について検討することが求められる。また、保育者養成課程の学びから保育者としての実践的学びへの移行に関する研究、10年以上の経験者を対象とした長期的縦断研究、ミドルリーダーシップ形成に関する研究も今日的課題である。